

妊孕性温存治療の費用について

保険適応はないため、全てが自費診療となります。
当院では、排卵誘発の注射開始から凍結まで、トータルで 30-60 万円程度必要なことが多いです。注射の種類や凍結個数などによって費用は前後します。
詳しくはお問い合わせください。

初回検査等	5,000 ~ 10,000 円	
凍結開始時	卵子・受精卵の個数により異なる	1 年間維持管理費を含む
保存更新時	20,000 円 (消費税別)	1 年間維持管理費を含む
カウンセリング料	30 分あたり 5,000 円	

不妊となるリスクを調べるには

日本癌治療学会ホームページ <http://www.jsco-cpg.jp/fertility/guideline/#/>
妊孕性温存ガイドライン
「表 2-1 化学療法および放射線治療による性腺毒性のリスク分類 (女性) ASCO 2013」

筑波大学附属病院 総合がん診療センター
生殖医療部門 **029-853-8096**

もっと詳しく知りたい方へ

インターネットのサイト

筑波大学附属病院ホームページ 妊孕性温存外来
<https://www.hosp.tsukuba.ac.jp/outpatient/special/fertility.html>
日本がん・生殖医療学会 「がん治療を開始するにあたって：将来お子さんを希望される男性患者さんへ」
http://www.j-sfp.org/ped/dl/cancer_treatment_brochure_m_jp.pdf
亀田メディカルセンター 「がん治療を始める前に！卵子・精子の凍結保存を考えてみませんか？」
<https://www.youtube.com/watch?v=yK9bF1kRyXc>
国立がん研究センター がん情報サービス 「妊よう性」
https://ganjoho.jp/public/dia_tre/diagnosis/fertility/fertility_01.html
日本造血細胞移植学会ホームページ 「妊孕性の温存」
https://www.jshct.com/modules/patient/index.php?content_id=14

がんに関する相談窓口

いばらき みんなのがん相談室
<https://www.pref.ibaraki.jp/hokenfukushi/yobo/sogo/yobo/cancergrp/caminna.html>



知っておきたい 卵子・受精卵凍結の知識

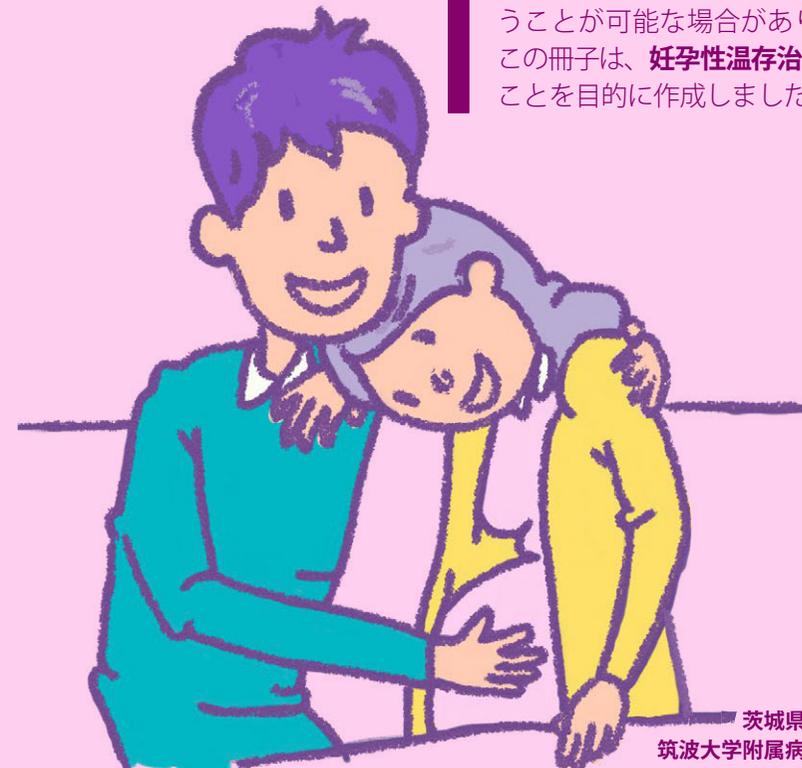
これからお子さんを望まれる女性患者さんへ



がん治療の進歩によって、多くの患者さんが、
がんと共に、あるいは克服することができるようになってきました。

一方で、がんの治療によっては卵巣にダメージが加わる場合もあり、治療後に妊娠・出産する力(妊孕性)が落ちることがあります。こうした患者さんに対して、妊孕性を温存する治療を、がん治療前に行うことが可能な場合があります。

この冊子は、**妊孕性温存治療**の理解に役立つことを目的に作成しました。



がん治療と妊娠

抗がん剤や放射線治療によって、卵巣にダメージが加わる場合があります。治療の内容によっては、治療後に病状が安定して主治医から妊娠許可が下りたとしても、自然にはお子さんを授かることが叶わない場合も少なくありません。がん治療により卵巣へのダメージが想定される場合に、がん治療前の卵子や受精卵を凍結保存しておいて、治療が落ち着いたところで、子宮に受精卵を移植して妊娠を試みる医療があります。これを妊孕性温存治療といいます。

抗がん剤と卵巣毒性

抗がん剤の種類によって、卵巣への毒性はリスク分けがされています。最もリスクが高いシクロホスファミドなどの薬は、高リスク群といって投与量などによっては治療後に70%程度の患者さんで閉経に至るとされています。また、白血病の骨髄移植前に行う放射線全身照射も、卵巣へのダメージがとて大きいとされています。

妊孕性温存治療の種類について

原則的には、未婚の場合は未受精卵凍結、既婚の場合は受精卵（胚）の凍結になります。月経がまだ来ていない方や卵子凍結ができない方などを対象として、卵巣組織凍結を行っている施設もあります。卵子凍結の場合は、将来、がんの治療後にパートナーの精子と受精をさせて受精卵を作って、子宮に移植することになります。移植した時の妊娠成績は受精卵凍結の方が良いため、パートナーがいらっしゃる方は受精卵の凍結をおすすめしています。

妊孕性温存治療の実際

不妊治療として広く行なわれている体外受精に準じて行います。まず、排卵誘発といって、10-14日間程度、毎日注射を行って卵巣に複数個の卵胞を育てます。たくさん育てることが確認できたら、卵を成熟させる注射を打ってから採卵を行います。卵巣の状態を確認するため、採卵までは3-4日に一度の診察が必要です。採卵は膣からエコーを見ながら針を卵巣に刺して、卵子を回収します。麻酔をして行うので、痛みはほとんどありません。卵子凍結の場合は、採卵当日に凍結します。受精卵凍結の場合は、採卵から数日間培養を行い、良い状態の胚であることを確認できたら凍結となります。

妊孕性温存治療の成績

凍結時や移植時の年齢などによっても大きく異なりますが、平均して卵子1個あたりの妊娠率は5~10%程度、受精卵では30~35%程度とされています。妊孕性温存治療を行えば、必ず将来妊娠できることが保証されたわけではありません。



当院における凍結物の管理について

がん治療が終わり、病状が安定して主治医から妊娠許可が下りてからの移植になります。長期保存が想定されます。保存については1年ごとの更新となり、毎年更新手続きが必要です。移植については原則凍結した施設で行いますが、万一凍結施設の閉院や閉鎖などがあつた際には、凍結物の移送が必要となります。また、凍結主体（卵子なら本人、受精卵なら夫婦どちらか）が死亡した際や本人が生殖年齢（当院では50歳）を超えた場合、さらには更新ができない場合、凍結物は破棄となります。



妊孕性温存治療を行う前に必ず理解しておきたいこと

- 今後行う予定のがん治療によって、どの程度妊孕性が低下するかを理解している
- 妊孕性温存の方法、必要な期間、費用、がん治療への影響を理解している
- 今後のがん治療の経過によっては、
妊娠が許可されず移植ができない可能性もあることを理解している
- 妊孕性温存治療を行えば、
将来必ずお子さんを授かるものではないことを理解している

上記のほか、妊孕性温存治療について主治医および生殖医による十分な説明を聞いて理解していることが重要です。